

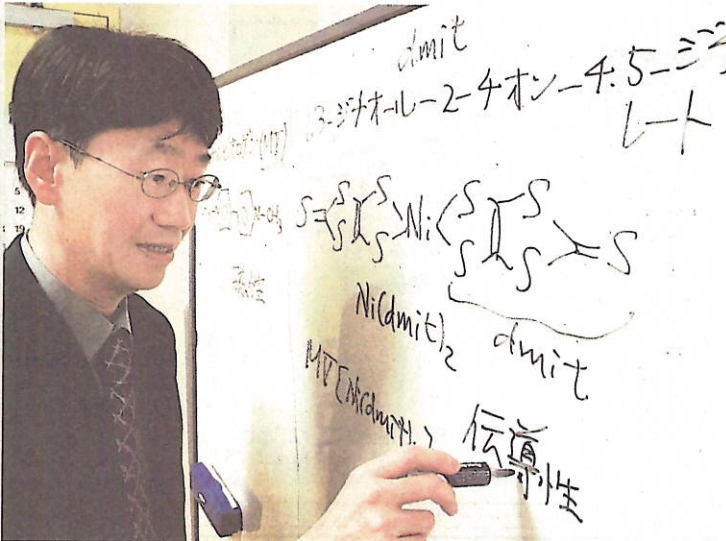
内藤教授 (愛媛大院) に源内大賞

電気・通信分野 先導的な業績

愛媛大大学院理工学研究科の内藤俊雄教授(52)は固体物性化学がこのほど、江戸時代に発明家や芸術家などとして才能を発揮した平賀源内にちなみ、電気や通信などの分野で先導的な業績を挙げた研究者らに贈られる第24回源内大賞を受賞した。

コンテストは、源内の遺業をたたえ発明工夫の思想の普及啓発を図ろうと、源内の出身地である香川県さぬき市のエレキテル尾崎財団が1993年度から毎年開催。今回は四国3県から14件の応募があった。源内大賞の授与は3年ぶり。内藤教授は2000年ごろから、パソコンなどの情報処理に活用される電気伝導性と、ビデオテープなどの磁気記録媒体に活用される磁性の二つの性質を、通常は電気を通さず磁場にほとんど反応しない有機化合物に付与する方法を研究し

有機化合物「光磁性伝導体」を合成



ている。受賞研究では、半導体材料などを製造する際に不純物を混ぜる従来法の代わりに光を用いた「光ドーピング」を開発。紫外光を当てた時だけ電気伝導性と磁性を発現する有機化合物「光磁性伝導体」を世界で初めて合成するなどした。

将来的には金属の代替物質として、太陽光発電可能な身にまとえる高性能のコンピュータや義肢などへの応用を夢見る内藤教授。「研究に携わったすべての人に感謝している。この研究はまだまだ課題があるが、一つ一つクリアし、自身の開発した物質が現在ない新しい物をつくるために使われたらうれしい」と笑顔を見せた。(多和史人)

光を使った物質の電気伝導性と磁性の制御法の研究で源内大賞を受賞した内藤俊雄教授

＝11日午後、松山市文京町